

インターンシップ体験記 (海外インターンシップの場合は英語で記入)

インターンシップの目的（自らが得ることに加え、相手先へ与えること）

インターンシップの目的は、①自らがモデル生物であるショウジョウバエクチュラの解析技術を習得し、クチュラ再生の研究を進めることと②非モデル生物で確立できた簡易的なクチュラ観察手法をショウジョウバエに適用し、インターン先に提供することであった。①については、解析技術についてはインターン先から教えていただいたが、上記に書いたようにクチュラ再生の研究自体はあまり進めることができなかった。②については、やはり生物種が変わると、技術を適用するのが難しく、逆にインターン先からアドバイスを受け、あまりインターン先に貢献をすることはできなかった。

同僚・上司・教員とのコミュニケーションについて学んだ点や気づいた点

現地での一泊二日の間に、インターン先の学生と自身の研究や相手の研究についてディスカッションをする機会があった。コロナで学会がない中、久しぶりの分野外の方とのディスカッションだったので、とても楽しかった。教授、准教授の教員の方とは、朝晩に挨拶をする程度に終わってしまったため、もう少しコミュニケーションを積極的に取れば良かったと感じている。

インターンで実際に指導をしてくださった先生の研究の進め方について大変参考になった。計画のディスカッションの段階で、短時間の間に効率よく実験を行うというメリハリの意識を非常に感じた。私は最近その意識が薄れていたもので、今後はそのような意識を持って、普段の研究に取り掛かりたい。

成長したポイントや達成できなかった課題、それらを今後はどう生かすか

ショウジョウバエの基本操作を学べたのが良かった。一方で、課題としては、研究テーマの設定である。今後は、先行研究の続きをやるようなテーマを進める場合、短時間で再現ができなかった場合に備えたい。加えて、先行研究を行なった研究室に実際にコンタクトを取るのもいいように思われた。

もう一つ課題として、現地で教わった技術を、大阪大学に戻ってきてから再現するのにも苦労した。原因は、試薬の種類の違いや、顕微鏡の種類の違いである。今後、別機関で実験をする機会があれば、今回の経験を活かしたい。具体的には、別の場所で行うことを意識して、指導を受けるようにしたい。

研究室とは異なる分野、業界で働いたことで得た体験。

ショウジョウバエは、非モデル生物とは異なり、できる実験が幅広く、サンプル数もかなり多いことに新鮮さを感じた。それぞれの実験に使う生物の特徴をしっかりと把握して、研究テーマに合った対象生物を選ぶことを意識して、今後の方向性を考えていきたい。

インターンシップ体験記 (続き)

週末の活動を含め、宿泊、食事、治安、物価などの現地での日々の生活について

オンライン開催のため、ほとんど該当しないが、一泊二日の現地実施時には、大学からバスおよび歩いて 15 分程度の場所にあるホテルに宿泊し、周辺で食事をとった。通常の出張と大きな違いはない。

その他、インターンシップの体験から学んだ重要だと思われること。

一番の学びは、先行研究の再現を取ることが難しい場合もあるということである。今後、研究テーマを設定する際には、しっかりとパイロットスタディを行ってから、スタートするようにしたい。今回の場合は、ショウジョウバエを扱うのが初めてであったので、研究をスタートさせるために指導をしていただくことは必須であったが、指導をしていただいたものの進捗が芳しくなく、大変申し訳なかったのが、今後は、ある程度自分で結果が出せそうだと判断してから、共同研究なり、実験の指導なりをお願いしようと思う。

結果が芳しくなく進捗が悪い中、励ましてくださいながらインターンを進めてくださった東京大学田尻怜子先生、コロナの影響がある中、現地での一泊二日での実施を認めてくださった東京大学藤原研究室の皆さま、ショウジョウバエの管理スペース、エサ等を分けてくださった大阪大学甲斐研究室の皆さま、お忙しい中本当にありがとうございました。